

# 異文化コミュニケーションについて

文学部英語コミュニケーション学科教授

鈴木 雅光

1. はやり言葉としての「異文化…」
2. いつ頃から使われたのか
3. 異文化コミュニケーションとは何か
4. 異文化コミュニケーションの3つの段階
5. 受けがよい異文化コミュニケーションだが
6. 英語を学ぶのに異文化理解は必要か
7. 多言語社会の国
8. 理想化するスイス
9. 誤解に基づくスイス
10. まとめ

## 1. はやり言葉として「異文化…」

昨今、我々の周りには、異文化コミュニケーション、異文化理解、多文化理解（共生）、異文化間能力、異文化接触といった言葉が溢れている。このような類似の言葉はその定義が曖昧なまま使われているようである。この方面の研究は、心理学や教育学を専攻する研究者を中心に活発になっているが、この領域は言語研究とも関連があるので、英語を教える者も無関心ではいられない。英語を学ぶ多くの学生が留学を目指し、また日本の大学に留学生が目立つようになり、教える側も異文化との接触の機会が増えているからである。

昔は英語を学ぶのに、異文化コミュニケーションや異文化理解などの言葉は使わなかった。1990年発行の異文化コミュニケーション関連の本<sup>(1)</sup>に、「何年か前までは専門家の間でしか使われていなかった異文化間コミュニケーションという言葉が、ここ数年は、とくにマスメディアを通してあちこちから聞かれるようになってきた。」(傍点筆者)とある。

## 2. いつ頃から使われたのか

「異文化…」というような言葉はいつ頃から使われ始めたのか。日本語用例検索と少納

言<sup>(2)</sup>で「異文化コミュニケーション」「異文化理解」「多文化理解」を検索してみた。文学作品6,300件のデータベースである日本語用例検索には、これらの語はまったくなかった。「コミュニケーション」という言葉すらなかった。

新聞、雑誌、国会議事録など約1億500万語のデータベースである少納言（1971年以降の例がある）には、「異文化コミュニケーション」は9件あった。出典元の本の出版年は2003年以降である。「異文化理解」は9件で出版年は2000年以降、「多文化理解」は1件で出版年は1996年である。

少納言には「異文化」は221件あり、一番古い例が1986年であった。「コミュニケーション」は3,070件あり、500例表示された中で一番古い例が1977年であった。両語を組み合わせた「異文化コミュニケーション」は上述のように9件あり、一番古い例が2003年である。このことから、二語を組み合わせた「異文化コミュニケーション」は、ずっと後からできた言葉であることが分かる。

異文化コミュニケーションの前に、1980年代から使われ出した「国際化」という言葉があった。その後1990年代から「グローバリゼーション」という言葉に変わった<sup>(3)</sup>。少納言で「日本の国際化」を検索してみると、16件ヒットした。最も年代が古い例は次の例である。1987年に開催された第109回国会（参議院常任委員会）での会議録が出典である。

とりわけ日本の国際化あるいは国際国家として日本がいかにかこれから生きていくか、…  
…

「グローバリゼーション」は323件ヒットした。最も古い例は、1994年に大蔵省印刷局から発行された通商白書である。

……、(2) 補助金と構造調整、(3) 産業活動の国際化（グローバリゼーション）などについての検討を行った。

寺沢（2014: 77）は、「国際理解のために英語を教える」や「英語教育は外国の文化吸収のためだ」というようなことは、表現に多少の差はあるものの、戦前から流通していたものと述べているが、盛んに言われるようになったのは、やはり1990年代頃からであろう。主に経済の分野で国際化が叫ばれ、国際企業の発展に伴い、グローバリゼーションと盛んに言われるようになった時期である。

### 3. 異文化コミュニケーションとは何か

コミュニケーションと文化は関わり合いがある。コミュニケーションは、例えば挨拶程度

の単語を並べるだけで可能であるが、それだけでは深い人間的な交流にはつながらない。しかもコミュニケーションには、互いの価値観が異なる場合、衝突や摩擦がつきものである。我々は、大概、自文化中心で行動をするからである。お互いのコミュニケーションを円滑にするためには、相手の文化を知らなければならない。異文化を知ることで、相手の文化に敬意を払い、自文化を抑制すれば、譲り合う心が生まれる。ところがそううまく行かないのが異文化との交流である。

異文化コミュニケーションはこのような問題を研究する領域である。異文化コミュニケーションは、コミュニケーションと文化の相互関係を明らかにすることで、異文化理解を深めると言われる。従って、異文化コミュニケーションと異文化理解は密接に関係がある。コミュニケーション能力が優れていたとしても、異なる文化に対する理解や受容がなければ、異文化コミュニケーションはうまくいかない。

#### 4. 異文化コミュニケーションの3つの段階

青木（2001: 143-145）は、イギリスの社会人類学者の説を紹介し、コミュニケーションには3段階のレベルがあると述べている。コミュニケーションの第一段階は「信号的なレベル」であり、この段階は誰でも大体理解できるレベルである。第二段階は「社会的レベル」であり、社会的な習慣であるので、常識レベルで消化できる段階である。第三段階は「記号的なレベル」である。この段階になると外部の者にとっては、理解するのが非常に困難な世界となる。

異文化理解は、社会的レベルにとどまっている場合が多い。2つ目のレベルまではなんとか理解できるが、3つ目のレベルになると、理解が困難あるいは理解不能となり、また克服できないレベルである。

研究者の多くが触れる異文化理解は、第三段階のレベルまで到達することを望んでいるものと思われる。なぜなら、第一、第二段階はそんなに努力せずとも、到達できるレベルだからである。第三のレベルに到達するには、異文化理解能力や異文化適応能力、すなわち異文化トレーニングが必要となる。これがうまくいかないと、ギャップが生じて、精神的に滅入ったりすることがある。

本来人間の価値観や世界観はそれぞれ異なるのが自然であり、それが異なる人種であればあるほど、大きな隔たりが生じるものである。第三レベルに達するには、本来の自分とは違う資質を持たなければならない。それができるかどうか、第三のレベルの試金石である。観念的に可能としても、人間は感情の動物であるから、そこが難しい。

異文化を理解するということは、他国の文化を観察し理解することで、自国の文化を理解することであるが、人間はそれぞれ価値観の違う物差しを持っている。自文化の中での物差しの違いは小さいが、異文化の中での物差しは限りなく大きいことが普通であるので、異なる物差しを合わせるには大きな努力が必要である。

## 5. 受けがよい異文化コミュニケーションだが

英語教育においても、一種の流行語になっている異文化コミュニケーションは、学生にはなかなか好感度を持って受け入れられる言葉である。英語で言うcross-cultural understanding [communication/experience/awareness/training]などを教える異文化理解や異文化コミュニケーション関連の科目は、聴講生を比較的多く集める人気科目となっている。受けがよいから濫用という状態でもある。

しかしながら、学生はこれらのキーワードに良い反応を示す一方で、異文化理解の方策が分からず、また国内にいる限り、それを積極的に学習することもないので、異文化理解にはほど遠い存在の者が多いのも事実である。ある面で見れば、これらという言葉に、踊らされているとも考えられる。しかも日本は海に囲まれているので、他の国の人々と日常的に交流することはほとんどない。

筆者の所属する学科にも留学生が増えているが、留学生の大半を占める中国人と、どう交流していいのかわからないようである。政治的にデリケートな問題があるが、日本人学生は交流したくともその方策がわからない。すなわち、異文化トレーニングを受けていないために起こる疎外感や焦燥感を感じる学生が、少なからずいるのである。

日本人にとって、異文化体験も多言語体験も海外に出かけなければ気付かず、また経験できないという地理学的な問題がある。加えて、日本人は異文化トレーニングの経験が少なく、異文化適用能力の育成において不利な状況に置かれている。多くの人にとって、異文化体験をしたければ、海外に出かけるしかない。

異文化コミュニケーションや異文化理解と言えば、ほぼアメリカのそれに限定されている。日本人の習う外国語はほとんどが英語である。我が国で「外人」と言った場合は白人であり、アジア人は含まないのが明治以来の伝統である。従って、イギリス、オーストラリア、カナダなどの英語圏、特にアメリカに目が向きやすい。これは不均衡の異文化理解であり、英語圏中心の異文化理解に片寄りすぎている。地理学的に最も近い韓国や中国との異文化理解を考えることは少ない。その理由の一つに、中国語や韓国語を学ぶ者が少ないということがあげられよう。

欧米一辺倒の異文化理解の反省から、最近言われ始めたのは、日本文化を座標軸に据え、アジア圏や西洋の異文化を理解するということである。異文化理解のシフト替えであり、相手だけを見ていたのが、自分を見て相手を見るというシフト替えが起こっているのである。

## 6. 英語を学ぶのに異文化理解は必要か

英語教育は国際化に資するという意見は、至る所から聞こえて来る意見である。しかし、英語を学ぶ日本人が社会に出た場合、仕事で英語を必要とする者がほんの数パーセント程度で1割にも満たない<sup>(4)</sup>ことを考えれば、国際化云々という意見は英語教育の目標をあまりに

も曖昧にしている。

かつて「英語教育によって中学生の頭が国際的・世界的視野の中でものを考えるようになるというところが、あまりにも空想的である」と言った識者もいた<sup>(5)</sup>が、英語を学ぶ中高生が本当に国際理解のために英語を学んでいるのか疑問である。国際化や異文化理解のため英語が必要だというのは、英語教育関係者が自らの立場を守るための巧妙なレトリックにすぎないのではないか。

英語教育と異文化教育を組み合わせるのは無理があるように思う。英語教育が英語の運用能力の向上にあるのに対して、異文化教育は、他国の文化を観察し理解することで、自国の文化を理解することであるから、異文化を理解したとしても、英語力の向上にはつながらない。英語教育の目的はあくまでも英語力の向上にあり、その他のことは知っていれば役立つという教養程度のことである。学習者の第一の目的が英語力の向上にあるのに、教育者の現代的目的が異文化理解だとすると、双方の目的が一致せず教育的効果が減じるのではないか。異文化理解は人間関係をうまく築くということであり、英語力の向上にはほとんど関係がない。

とは言っても、グローバル社会の実現は、望むと望まざるとにかかわらず、異文化への配慮を必要とするのであるから、軽視するわけにはいかない。異文化理解はある一定の英語力がついてから学んでも遅くはない。英語学習早期のうちには逆にしないことが必要である。

## 7. 多言語社会の国

異文化理解や異文化コミュニケーションを考える場合、注目すべきことが一つある。多言語社会や多文化社会を実現させている国を観察することである。多言語・多文化の国というと、アジアではシンガポール、ヨーロッパではスイスがあげられる。例えば、研究者の論文題目を見てみると、「シンガポールの言葉と社会—多言語社会における言語政策」「多言語社会シンガポールにおける英語のモデルと規範」や「スイスにおける多言語・多文化主義」、「多言語多文化社会スイスの実状」「多言語多文化社会で言語教育が何をなするか：スイスの先進的な取り組みから」のようなものが目に入って来る。これらのことから研究者の多くが、多言語社会、多文化社会のモデルとして、シンガポール、スイスをあげていることが分かる。このことについて次節でさらに考えてみよう。

## 8. 理想化するスイス

異文化を理解するということは、他国の文化を観察し理解することにより、自国の文化を理解することである。しかし、他国の文化の観察はたやすいことであるが、理解は考えているほどには簡単ではない。異文化を理解するには、それを実践している国を見るのが有益である。多文化社会を実現させている国として、よくスイスが取り上げられる。

福田 (2014: 112) は、フランス語圏のジュネーブ州とドイツ語圏のバーゼル・シュタット準州での小学校の多言語教育を報告している。ジュネーブ、バーゼルとも移民の多い地区である。ジュネーブもバーゼルも、複言語主義及び行動中心主義という考え方が根底にあり、子どもたちが多くの言語に触れ、言語のレパートリーを増やし、言語への気づきを通して、各自の言語能力を最大限に活かして、実際の行動ができることを目指している、とスイスの利点を述べている。

スイスはドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語の4言語が共通語となっている。このことはしばしば称賛される。例えば、カルヴェ著『言語政策とは何か』(白水社 西山教行訳 2000年 p. 117) は、連邦レベルの規制が存在するのに加えて、バイリンガルの州(カントン)が教育の場で使用される言語の決定権を持っているスイスの多言語状況を「他国もうらやむような政治的モデル、言語計画のモデルを形成しているのである」と述べている。

我が国もスイスの言語状況については理想化する傾向にある。森田 (2004: 216) には、日本の教科書のスイス紹介では、「スイスがさまざまな地域からなる、多言語、多民族国家であるという事実がしばしば言及されている」とある。

日本がスイスを理想化するのには今に始まったことではない。明治37年(1904)に出版された本に安部磯雄の『地上之理想国瑞西』があるし、安部はこの書の中でスイスを「自由の小天地」と理想化している<sup>(6)</sup>。

第二次世界大戦後にも、スイスが、敗戦した日本のモデルとして、政治家から語られるようになった。「日本は東洋のスイスタレ」とか「太平洋のスイスになれ」とかが、スイスの実体もよく分からないのに、スローガンの言われた時代であった。「永世中立国」スイスをモデルにして、日本を中立国にし再軍備化を防ぐためのスローガンでもあった。

スイスの理想化としてよく引き合いに出されるのが、平和愛好国、永世中立国、直接民主主義の国、民兵制、民間防衛の国といったものである。

## 9. 誤解に基づくスイス

このような見方には批判もある。スイスは多言語社会・多文化社会であり、異文化理解がスムーズに行われているように考えられているが、これは理想化のしすぎであり、誤解に基づく意見であるという批判である。

増本 (2010: 20-21) は、「我々はフランス語圏のスイス人やイタリア語圏のスイス人とは共存しておらず、互いに無関係に隣り合って暮らしているだけである」とスイス人の劇作家の言葉を引用している。無関心は何ら問題の解決にはならないことを踏まえて、増本 (2010: 33) は、「互いに無関心であることによって摩擦を避け、多言語・多文化の平和的共存を実現しているスイスは、果たして21世紀の多文化共生社会のモデルと言えるのだろうか」と疑問を呈している。異なるものに敬意を払っているのではなく、摩擦を生じさせないために互

いに無関心であるというのである。なぜそのようなことになるのか。争いや摩擦の回避でよそよそしく生きることは、言語の消極的共存であるが、このような選択もある意味でモデルになる。

「外国人居住者の目から見た世界」に関するインターネット調査によれば、スイスは安全で生活や教育の質は高いが、外国人に対する態度が冷たいため、67ヶ国中31位であった。そして調査報告書には「スイスでは四つの異なる言語や文化が共存するにも関わらず、残念なことに、新しくスイスに移住してくる外国人の多様性に対してあまり寛容ではない」<sup>(7)</sup>と書かれている（ちなみに、日本もスイスと大した変わらず29位である）。あまり親切でない、歓迎されていない、友人を見つけにくいと感じている外国人が多いという。スイス人はもしかしたら、異文化理解は困難であると理解し、無関心を装っているのかもしれない。

古岩井（2001: 77）によれば、4つの公用語があるという、スイス国民が複数言語を日常生活で使用しているような印象を与えるが、必ずしもそうではない。Monolingual（一言語使用者）の方が圧倒的に多いということである。

作家の多和田葉子は、スイス人が「スイスには四ヶ国語、公用語があります」と言うと、何か美しい装飾品の話でもしているように聞こえる」と述べている（『エクソフォニー』岩波書店 2012年 p. 58）。「美しい装飾品」に騙されてはいけないということであろう。スイスはその牧歌的な風景ゆえに美しい国とよく言われるが、その内実は違うということを言いたいかもしれない。

スイスに対する日本人の見方は一般的には好意的である。森田（2004: 18-19）に紹介されているが、1873年刊行の本には「海なき国の瑞士、余所の軍に取合はず、常に太平無事なるは、西洋中の桃源と、言ふべき程の風気なり」とある。明治時代の自由民権運動では、ウイリアム・テルを自由の象徴とし、スイスは自由郷として詠われた。

一般の日本人がスイスに寄せる関心は観光であり、政治でも文学でもない。観光案内書はよく読まれるが、政治的な著作には関心が薄い。日本人でスイスの実体はともかく、スイスという国の名前を知らない人はいないであろう。勤勉さや時間を守ることでは両国は共通点が多く、男女の平均寿命、豊かさ、時計産業、高度に発達した鉄道などでは、常に日本とスイスの名前が併記されるように現れる。しかし、一般的には、日本人はスイスの一部を見て、スイスを理想化しているようである。日本人はスイスの牧歌的な自然を目に浮かべ、アルプスの聳える山国をスイスの理想像としている。通俗的に言えば、スイスは「ハイジの国」である。この点で「スイスに対する関心は主に観光の分野におけるものであって、政治についてはほとんど知られていない」<sup>(8)</sup>ということはいずれも正しい指摘であろう。多くの日本人は、小学校や中学校の教科書に出て来る「永世中立国」という言葉以外は、ほとんど何も知らない。また我々もそれ以上の関心を、このヨーロッパの中心に位置する小国に向けない。夏の避暑地の軽井沢程度の感覚が実態であろう。

Swissinfo (2016/08/02) で以下のような記事を目にした。要約すると次のようになる。2億人以上の人口のあるブラジル人にとって、スイスはほとんど知られていない国である。が、スイスという言葉はブラジル人は、政治家の汚職や隠し資産に関する報道で目にすることが多い。そのためスイスは銀行で有名で、多くの人がお金を預けている、そして「ブラジルの腐敗した政治家もまた同様にだ」と締めくくっている。最後の台詞は普通の人の感想であるが、政治的な発言と言ってもよい。

日本人に聞いたら、スイスに関してはこのような感想はまず出て来ないだろう。日本人にはスイスの悪口を言う人はほとんどいない。スイスと言えば、まず牧歌的な自然やアルプスを思い浮かべる国民は、かくも美しい国に、非常にダークなイメージを与える隠し資産を集め、富裕層の脱税に手を貸している銀行がある国、とは思いたくないのではないか。

## 10. まとめ

本稿では、異文化コミュニケーション、異文化理解、多文化理解などに関するいくつかの問題を考察した。本稿で述べたことをまとめてみる。

- ①昨今、我々の周りには、異文化コミュニケーション、異文化理解、多文化理解（共生）、異文化間能力、異文化接触といった言葉が溢れている。英語を学ぶ学生もこれらの言葉が気に入っている。
- ②異文化コミュニケーションとは、コミュニケーションと文化の相互関係を明らかにすることで、異文化理解を深めると言われるが、コミュニケーション能力が優れていたとしても、異なる文化に対する理解や受容がなければ、異文化コミュニケーションはうまくいかない。
- ③コミュニケーションには3段階のレベルがある。コミュニケーションの第一段階は「信号的なレベル」であり、この段階は誰でも大体理解できるレベルである。第二段階は「社会的レベル」である。社会的な習慣であるので、常識レベルで消化できる段階である。第三段階は「記号的なレベル」である。この段階になると、外部の者にとっては、理解するのが非常に困難な世界となる。
- ④異文化コミュニケーションや異文化理解は学生には受けがよいが、異文化理解と言えば、日本人の習う外国語はほとんどが英語であるので、英語圏中心の、特にアメリカの異文化理解に限定されている。
- ⑤英語教育と異文化教育を組み合わせるのは無理がある。英語教育の目的はあくまでも英語力の向上にあり、その他のことは知っていれば役立つという教養程度のことである。学習者の第一の目的が英語力の向上にあるのに、教育者の現代的目的が異文化理解だとすると、双方の目的が一致せず教育的効果が減じるのではないか。
- ⑥異文化を理解するには、それを実践している国を見ることが有益である。多言語社会や多文化社会を実現させている国として、よくスイスが取り上げられる。



- ⑦スイスは多言語社会・多文化社会であるため、異文化理解がスムーズに行われているように考えられている。しかし、実状を検討してみると、我が国も含めてスイスを理想化しすぎであり、理想化は誤解に基づく意見であるという批判がある。

### (注)

- (1) 鍋倉編 (1990: 3)
- (2) 日本語用例検索 (青空文庫所収文学作品)  
<<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~tanomura/kwic/aozora/>>  
少納言：Kotonoha「現代日本語書き言葉均衡コーパス」  
<<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>>
- (3) 青木 (2001: 121)
- (4) 寺沢 (2014: 64)
- (5) 寺沢 (2014: 61)
- (6) 森田 (2004: 22)
- (7) Swissinfo (2016/09/01)
- (8) 森田 (2004: 82)

## 参考文献

- 青木保. 2001. 『異文化理解』. 岩波新書. 岩波書店.
- 青木保. 2003. 『多文化世界』. 岩波新書. 岩波書店.
- 福田浩子. 2014. 「多言語多文化社会で言語教育が何をなしうるか: スイスの先進的な取り組みから」. 茨城大学人文学部紀要. 人文コミュニケーション学科論集16. <on-line>
- 加藤優子. 2009. 「異文化間能力を育む異文化トレーニングの研究」. 仁愛大学研究紀要 人間学部編. 第8号. <on-line>
- 小林和子. 1998. 「多言語国家スイスの初等学校における言語教育の動向— 第二言語教育か英語教育か—」. 高岡短期大学紀要 第12巻. <on-line>
- 古岩井嘉蓉子. 2001. 「多言語多文化社会スイスの実状」. 神奈川大学人文学会誌 142. <on-line>
- 増本浩子. 2011. 「科学研究費補助金研究成果報告書 スイスの多文化主義とナショナル・アイデンティティ」. 神戸大学. <on-line>
- 増本浩子. 2010. 「スイスにおける多言語・多文化主義」. 神戸大学文学部紀要 37. <on-line>
- 森田安一編. 2004. 『スイスと日本』. 刀水書房.
- 鍋倉健悦編. 1990. 『日本人の異文化コミュニケーション』. 北樹出版.
- 示村陽一. 2006. 『異文化社会アメリカ〔改訂版〕』. 研究社.

- 鈴木雅光. 2010. 「アルプスのロマンシュ語」. 東洋大学文学部紀要 第63集. 英語コミュニケーション学科篇. *dialogos* 第10号.
- 寺沢拓敬. 2014. 『「なんで英語やるの？」の戦後史—《国民教育》としての英語、その伝統の成立過程』. 研究社.
- 渡辺文夫編. 1995. 『異文化接触の心理学—その現状と理論』. 川島書店.

## On Cross-cultural Communication

SUZUKI, Masamitsu

It is usually said that communication is profoundly related to culture. Cross-cultural communication means an understanding of how people from different cultures communicate and perceive the world around them.

Students who are learning English have a particular fondness of such words as “cross-cultural communication,” “cross-cultural understanding,” or “cross-cultural experience.”

According to a British scholar, there are three stages on cross-cultural communication. The first one is a signal level. In the first stage everyone usually understands different cultures. The second one is a social level. In the second stage everyone understands different cultures through common sense. The third one is a symbolic level. In the last stage almost everyone cannot understand different cultures.

Switzerland is often illustrated as a model of a nation of multicultural countries, since people of different nations or ethnic groups live together there. However, is it true that Switzerland is a successful model for multiculturalism? There are pro and con arguments concerning the question. In the paper I investigate Switzerland called a multi-national state, considering the meaning of “cross-cultural communication.”